

悪魔のいるクリスマス

在間ジロ

天使
少年 A
少女 A
私
登場人物

私（小声で）「腹が煮えくりかえった」とは言えない。正しくは「腸（はらわた）が煮えくりかえる」。腹は胃腸のあるところであり精神的な意味はない。腸（はらわた）は肉体的な名称以上に魂を示すこともある。

「虫にさされる」と「食われる」を混同してはならない。さされるは瞬間、食われるは長い時間。「着物が着れません。車から降りれません」。などは最近よくめだつ日本語の乱れた用い方。正しくは、可能を表わす助詞、「ら」を必要とする。よって前者は「着られませんか」後者は「降りられません」が正しい。

「戦後以来初めての云々」・・・はだぶった言い方。後と以来が重複している。同様に「いちばん最初」と言うのもおかしい。「一歩前へ前進」や「うしろへバック」というのも重複。「ここから」約一時間ほどの距離」というのもおかしい使い方で、「約」と「ほど」は同意語である。

「引き続き野球中継を続行します」。などというアナウンサーがいるが、もちろん重複。「被害をこうむる」。は被害を受けたとした方がよい。被害というのは害をこうむるという意味だからである。

「沿岸沿いの町」というのも変。海岸沿いとすれば間違いはない。

「歯にころもをきせない」。は歯にきぬをきせないが正しい。

「出る釘は打たれる」。なんてのはよくある間違い。正しくは「出る杭は打たれる」である。

「古式豊かに」、などと結婚式でよく使われるが、正しくは、「古式床しく馬上豊かに」である。床しいとは上品ですぐれているの意味。

少女が一人、チョークを一本持って立っている。

私「新宿をしんじゅくと読むのは東京新宿区。大田区ではしんしゅく。にいじゅくというのが葛飾区にある。他にあらじゅくと読む地名が川越市にあり、新宿は、（少女に気づいて）今晚わ。

少女A「今晚わ。

私「ああ、今晚は。

少女「……………」

私「あの、ブランコ、かわりましようか。」

少女A「いいえ。」

私「寒いですね。」

少女A「冬ですもの。」

私「ええ。」

少女A「くせなんですか。」

私「え？」

少女A「一人で一人言を言っていましたね。」

私「一人で一人言を？」

少女A「はい。」

私「一人言は一人で言うんだから、一人で一人言を言うとは、言いません。」

少女A「一人言を言っていましたね。」

私「ええ言っていました。あつ、それから今思い出したんですが、一人言は本当はケモノヘンに虫と書いて、独り言です。モノログです。一人、二人の一人とは書かないですよ。」

少女A「ずいぶん神経質なんですね。」

私「ええ、仕事がら、どうしてもね。私は大学出てないもんで、どうしても他のみなさんに比べて教養がないんですよ。漢字もあまり読めないし。で、ときどき、恥かしいマチガイをするんです。あなたね、着物が着れないなんて言いませんか。」

少女A「言いますよ私。」

私「それ、間違ってるんですよ。」

少女A「どうしてですか。友達もみんなそういうふうに言いますよ。」

私「あれはね、着られないと言うのが正しいんです。」

少女A「着れないじゃ駄目ですか。」

私「ええ。間違ってるんです。」

少女A「でも、ちゃんと通じますよ。」

私「通じてても、間違いは間違いですからね。」

小女A「だって、うちの母さんもそう言いますよ。」

私「お母さんも、間違ってるっしやるんです。」

少女A「誰が決めたんですか。」

私「え？

少女A「誰がそういうふうを決めたんですか。衆議院ですか参議院ですか。それとも憲法の第何条かにあるんですか。

私「いや、これは何もその、民主主義的に決まったわけじゃないんです。

少女A「じゃあ法律で決まってるわけじゃないんですね。

私「そうです。

少女A「すると、着物が着れないと言っても捕まえられたり、罰金を払ったりしなくてもいいんですね。

私「それはもちろんそうです。

少女A「じゃあ、使っても悪いわけじゃないんだ。

私「悪いというんじゃないで、正しくないと、そう言っているんです。

少女A「ああ、分かった。

私「分かりましたか。

少女A「ええ、それはたぶんこういうことなんでしょ。ほら、メクラを眼の不由由な人と言い、チンバを足の不由由な人と言い、床屋さんを理髪店と言い、河原乞食を俳優と言う、その、言い替えのことなんでしょ。

私「全然違います。

少女A「じゃあ、何が正しくないのかな。

私「文法です。つまり文章の法律です。それに、適ってないんです。

少女A「それは道路交通法のようなものですか。

私「でもないんです。

少女A「ふーん。

私「ですから文法上、着れないとは言えないんです。もちろん、着れるとも言えません。

少女A「あなたは、文法の人なんですか。

私「文法の人？ 何ですかそれは。

少女A「文法の方面の方なんですか。

私「方面というと、

少女A「文法の仕事をやってらっしゃるんですね。

私「いや、そうではありません。

少女A「でも、さっき、仕事がらっておっしゃったじゃないですか。

私「ああ、ああ、そう、そうです。いやそうじゃないんですが、まあ、関係はあります。
少女A「何のお仕事ですか。

私「つまらん仕事です。

少女A「退屈なお仕事なんですか。

私「いえ、そうでもないんですが。

少女A「つまらないんですよ。

私「それは謙遜して言ったんです。退屈な仕事というわけではありません。私自身は退屈な男ですが

少女A「旗本の方ですか。

私「旗本？

少女A「はい。

私「いいえ。

少女A「じゃあ会社員ですね。

私「いいえ。

少女A「学校の先生だ。

私「違います。

少女A「お医者さん？

私「いいえ。

少女A「弁護士。

私「まさか。

少女A「板前。

私「どうして。

少女A「植木屋。

私「なんで。

少女A「ヤクザ。

私「ちよつと近いな。

少女A「ヒモ。

私「残念ながら。

少女A「水商売。

私「かも知れないな。

少女A「刑事！」

私「全然。」

少女A「どろぼう。」

私「ノウ。」

少女A「タレント。」

私「ううん。」

少女A「アナウンサー」

私「はずれ。」

少女A「作家。」

私「あたり。」

少女A「土建屋。」

私「いえ。」

少女A「政治家。」

私「あのね、

少女A「スパイ。」

私「あの、

少女A「たばこ屋。」

私「もし、

少女A「スケベ。」

私「ストップ！」

少女A「はい。」

私「もう、あたってるんですが。」

少女A「じゃあ、スケベですか。」

私「そりゃまあ、それもそうですが、それは職業じゃないでしょ。その前です。」

少女A「たばこ屋？」

私「その前。」

少女A「スパイ？」

私「その前。」

少女A「え！じゃあ政治家ですか。」

私「その前です。」

少女A「その前、その前はえーと、花屋さん？

私「いいえ。」

少女A「JRの職員。」

私「そんなの出てきましたか。」

少女A「えーと、ガスの集金の人。」

私「それも出てこなかったですよ。」

少女A「デザイナー。」

私「いいえ。」

少女A「金魚屋さん？

私「一番上の字が「さ」です。」

少女A「左官屋。」

私「違う。」

少女A「詐欺師。」

私「ちがう。」

少女A「防人。」

私「まさか。」

少女A「祭司。」

私「いえ。」

少女A「催眠術師。」

私「ハハハ。」

少女A「酒屋。」

私「二番めが小さな「つ」です。」

少女A「作曲家！」

私「近い。」

少女A「サッカーの選手。」

私「あのねえ。」

少女A「殺虫剤販売人。」

私「作家です。」

少女A「分かった。」

私「分かりましたね。」

少女A「作家だ！」

私「はいはい。あたりです。」

少女A「やたっ。」

私「おめでどう。」

少女A「作家なんですか。それで、文法のことを気にしてたんですね。」

私「そうです。」

少女A「分かりました。私これから、服が着れるって言いません。ちゃんと着れらるって言います。」

私「着れらるじやなくて、着られる、ね。」

少女A「はい。そう言います。」

私「そうして下さい。」

少女A「へーえ、作家なのか、ふーん、いいなあ。」

私「よくありません。」

少女A「どうしてですか。格好いいじゃないですか。」

私「格好いい？」

少女A「ええ。作家ってステキじゃないですか。私一度でいいから、作家と心中してみたいと思ってたんです。」

私「恐いこと言わないで下さい。そりやあまあ、中には格好いい作家もおります。それはアナタ、格好いい銀行員がいるのと同じです。作家といっても私は劇作家ですから、

少女A「うわっ、劇作家っ。ますます格好いい。」

私「どうしてですか。」

少女A「だって、作家の上に劇がつくもの。」

私「

少女A「芥川賞とか直木賞とか、もう、とったんですか。」

私「とんでもない。」

少女A「どんな本が出てるんですか。」

私「本、本ね。私の？」

少女A「ええ。」

私「本ねえ。」

少女A「作家って、本を出版するんですよ。」

私「本を出版するのは出版社です。」

少女A「私、買います。何て本ですか。」

私「本は 三年程前に 一冊だけ 戯曲集が 小さな出版社から出ました。」

少女A「どういう題名ですか。」

私「悪魔のいるクリスマス」

少女A「悪魔の 」「はい、憶えました。それから？」

私「それからは、 もう、何も。」

少女A「何も出してらっしゃらないんですね。」

私「いや、その本だって、部数はたかが六百部なんです。一二〇〇円もするんですが、ソフトカバーの二百ページくらいの目立たない本で、出版された日に私、本屋という本屋を、この町の書店という書店を、駅頭の売店まで回りましたが、何処にも置いてなかったですね。で、私、大きな町へ行けば大きな本屋があるから、そこにならあるだろうと思って、電車に乗って出かけました。N市まで行ったんです。そこで駅の地下の一番大きな本屋へ行行って、本棚を捜しまわって、それでやっと見つけました。演劇・映画コーナーって書かれた棚に、一冊だけありました。私は最初、新刊書コーナーにあるんじゃないかとばかり思って、そこをウロウロしていたんです。そこはもう、新聞の広告に出てくるような本ばかりで、そんなところに私の本など置いてくれるわけがなかったんです。さすがに大きな本屋さんで、店内は大変多数のお客で、混雑していました。雑誌とマンガのコーナーなんかは立ち読みのお客でいっぱいでした。その人ごみをくぐりぬけて、妙にヒソソリとしたコーナーにたどりつくと、そこは思想・哲学のコーナー。で、その隣りに芸術ってコーナーがあつて、なおも、人通りの少ない村八分のようなコーナーへ行くと、そこが演劇と映画のコーナーなんです。三分の二は映画の本。残りの棚の半分近くは流行作家の『や』の本。それから偉い人の本が数冊あつて、一番ハジッコに私の本が、キュークツそうな顔して、並んでました。すぐ隣りはTOILETなんです。そこには客なんか誰もいません。私、一時間ばかりそこに立っていました。小便しに来る客が通り過ぎるだけでした。私も小便しました。

少女A「オシッコして帰ってきたんですね。」

私「そうです。」

少女A「でも、先生が帰った後で、誰かが買ったかも知れませんか。」

私「先生？」

少女A（私を指さす）

私「よして下さい。」

少女A「でも、作家だから。」

私「とんでもない。」

少女A「でも、どんなコーナーに置いてあっても、本は本なんだから、売れる時は売れるし、買う人は買うだろうし。」

私「いえいえ、売れるまで本屋が本を置いてくれるなんてことはありません。売れない本は三日程で出版社へ返本されるのです。私の本もそうでした。全部で百冊も売れなかったらしいです。出版社はそれから半年後に倒産して、私には印税の代わりに、現物のその本が三百冊、手渡されました。」

少女A「もっと宣伝すれば売れたかも知れませんか。」

私「ええ。」

少女A「何でも宣伝しないと駄目なんですよ。宣伝しても売れない物もあるけれど、宣伝しないと絶対売れませんよ。」

私「そうです。」

少女A「私、宣伝してあげます。」

私「え？」

少女A「ここで会ったのも何かの御縁でしょうから、私、先生の本、宣伝します。だから、もう少し待って下さい。もう少ししたてば、私、きっと有名になりますから。」

私「有名に？」

少女A「はい。私、歌手になるんです。」

私「へーえ、歌手に。」

少女A「はい。私がどうして、こんな人気のない公園に来たか、分かりますか。」

私「いいえ。」

少女A「これです。（チョークを見せる）

私「これはハクボクですね。」

少女A「ええ、白いチョークです。」

私「歌手、人気のない公園、チョーク。面白いナゾナゾですね。」

少女は地面にチョークで何やら描き始めた。長方形の図形。短いヘンが二メートル。長い

ヘンが六メートル程の長方形だ。

少女A「はい、これでステージができました。残ったチョークはピンマイクです。歌います。木枯吹子オン・ステージ。」

木枯しが吹いて

雪になったよ

ホワイトな雪

ホワイトな私

ホワイトなクリスマス

だけど悪魔がやってきて

私のハートを

くすぐるの

くすぐったいわね

いい気持よ

早く きてきて

悪魔のいるクリスマス

少女A「どうでしたか。宣伝になるでしょうか。」

私「ホワイトな雪ってのはなかなか新鮮な言葉ですね。」

少女A「では続いて二曲めです。」

木枯しが吹きあれて

冬は寒いのです

マッチ売りの処女は

愛のマッチをすりました

ほのかに浮かぶ

夢

白い夢

ああ 雪の女王が

涙をひとしずく

私にくれました

私は あなたを 待っています

少女A 「今度のはどうですか。

私 「作詞がいま一つですね。

少女A 「じゃあ、もう一曲。

木枯しピープー

雪の子供をつれてくる

町も村も白い花

愛の物語が始まる街角で

そっとキスしてね

私の悪魔

もう もう 私

私 泣いてしまっちゃう

私 「モウモウと鳴くのは牛ですね。やっぱり今ひとつ、詞がまとめられてないようですね。

少女A 「じゃあ、先生、どうか私に詞を作ってください。先生の本が売れるくらいに私が有名になる詞を。

私 「では、ちょっと考えてみましょう。

少女A 「よろしくおえがいますーふ。

私 「そうですね、まず、

「木枯しが吹く

少女A (首をひねる)

私 「いや、木枯しはもうやめましょう。木枯しは何度も出てきたから。それじゃあ、
「北風が枯く

というのもありふれてますね。そうすると、もう風が吹くのはなしにして、

「風の吹かない

と、これはちよつとダイレクトだな。そうすると、

「吹くか吹かぬか北風よ

ふく ふけ ふけ ふけ

ふかぬとき ふこう

ふきます ふいてみる

少女A「何か男っぽすぎませんか？

私「そうですね。

少女A「やっぱり少女っぽい方が。

私「少女っぽくね。えーと、

「黒い瞳の少女が一人

星をみつめて泣いていた

あれは 死んだ 母さんの星

あれは 死んだ 父さんの星

あれは 死んだ 祖母さんの星

あれは まだ生きてる ジジイ星

少女A「それ、ユーモアですか。

私「どうも、うまくいかないな。えーと。

「月夜のうさぎが

ピョンと出た

そいつの名前は

ピョン吉だ

少女A「それ童謡ですか。

私「うーん。じゃあ、えーと。

「誰もいないはずの公園に

「雪は降っていた

少女A「今度はいけそうですね。

私「そうですね。

「雪は降っていた

シンシンと

音もなく

夜はふけていく

あなたは来ない

いくら待っても

白い雪が

少女A「それ、どっかで聞いたことがありますよ。

私「換骨奪胎です。もう一度初めっからいきます。

「雪は降る

誰もいない公園

音もなく

シンシンと

夜はふけていく

シンシンと

あなたは来ない

私は待ち呆け

ルージュの口紅

もう冷たい

さよなら

ベアトリーチェ

ベアトリーチェ

少女A「何か今いちですね。

私「いやあ、流行歌の詞というのは難しい。こういうこと、私、やったことがないですから。

少女A「宣伝、難しくなってきましたね。

私「私の本の宣伝ならいいです。売れるなんてハナッから思っていないですから。そうだ、あなたにも一冊あげましょう。

少女A「ほんとですか。

私「ええ、いつも何冊か持って歩いてんです。はい、どうぞ。

少女A「ありがとうございます。でも、これ、一二〇〇円なんですよ。

私「ソフトカバーにしては、高価いですよねえ。」

少女A「あの、私、買います。これ、やっぱり、私、お金出しますから。」

私「いえ、いいんですよ。」

少女A「でも、やっぱ。」

私「いやいや、本当にいいんです。」

少女A「でも、本が売れないと、先生、食べれないんじゃないですか。」

私「食べれない、ともいえません。着れないと同じです。」

少女A「ああ、そうでした。すみません。」

私「まあ、いいですよ。いまじゃ、ワープロでも、食べれない、着れないで、ちゃんと漢字変換しますから、もう、いいですよ、きっと。コトバってのは、時代とともに変わっていくものですから。」

少女A「で、あの、先生は、食べられないんじゃないんですか。」

私「あのね、あなた。本の印税で食ってるもの書きなんてのは、ごく少数のめぐまれた連中だけです。」

少女A「じゃあ、失礼ですけど、どうやって、生活されてるんですか？あの、参考までに、聞かせて下さい。」

私「参考までにねえ。ええ、いいですが、こんなもの、なんの参考にもなりやしないとは思いますが。」

少女A「仕事はなさってるんでしょ。」

私「ええ、もちろん、これでも家族がおりますから。」

少女A「何かの雑誌にお書きになってるんですか。」

私「まあ、少しは。」

少女A「スゴイ。」

私「スゴクなんかありませんよ。地方の情報誌に月一回。業界新聞に一本、週一回のコラムを持つてるだけです。」

少女A「二本も連載されてるんですか。」

私「連載ったって、両方あわせて、月に五万円にしかありません。」

少女A「それで、生活されてるんですか？」

私「まさか。これは、私の小遣いです。」

少女A「じゃあ、何を。」

私「きぐるみのイベントをやってみてね。

少女A「ああ、中にひとが入って動く、動物のぬいぐるみ。

私「そうそう。そのイベントの構成やら、音出しやら、場所によっては、照明をあてたり、弁当の調達から、送り迎えとかね、まあ、いろいろ。

少女A「イベントの構成ですか。

私「いや、ですから、そんなたいしたもんじゃないんです。デパートの屋上とか、マーケットの店頭とか、開店したての店舗のにぎやかですよ。毎週、土日と祭日に出かけていくんですよ。さつきもいきましたように、雑用やら、マネージャーやら兼業して、これやつと、月二十万ばかりになるんです。あとは女房も働いてますから。なんとか。

少女A「夢がありますね。

私「夢!？」

少女A「ええ。クマとかタヌキとか、パンダが出てくるストーリーをお書きになるんですよ。

私「ストーリーって程のものじゃないですよ、ショーは一回五十分とだいたい決まってるんです。それでオープニングとエンディングを合わせて五分。クイズが十分。ゲームが十分。子供のど自慢が十分。ぬいぐるみのお芝居が十分。お知らせが五分。これを一日二回やるんです。一部タレントや私をのぞいては、みんな大学生のアルバイトです。前の日に、ぬいぐるみを着てもらって、テープから流れてくる音楽と台詞に合わせて、一通り動いてもらうんです。これがケイ古です。ケイ古はノーギャラだから、あんまり何度もやれないんです。ですから、ストーリーは簡単なものでないと駄目なんです。すぐ覚えられるようなもの。

少女A「でも、子供たちが喜ぶようなものを書くんですよ。

私「ええ。それは簡単なんです。

少女A「と言うと何かコツがあるんですね。

私「コツって程のものじゃありません。転べばいいんです。

少女A「ころぶ?」

私「そうです。オオカミでもタヌキでも何でもいいんです。ストーリーもどうでもいいんです。ただ、一度か二度、何でもいから、ぬいぐるみが転倒するシーンを入れるんです。これで子供は大喜びします。

少女A「ぬいぐるみが転ぶと、子供が喜ぶんですか。

私「そうです。

少女A「何故ですか。

私「さあ、何故でしょうね。やっぱり、他人の失敗というのが面白いんでしょうかね。

少女A「他に、子供たちが喜ぶところってないんですか。

私「そうですね、オオカミがやつつけられて、投げ飛ばされるところとか。

少女A「投げ飛ばされる。

私「そうです。あとは、ボカスカ殴られるところとか。

少女A「殴られる。

私「ええ。

少女A「

私「夢なんかありませんよ。これっぽっちも無い。

少女A「母親はだまって見てるんですか。

私「子供に言いますね。

少女A「あんなことしちゃ駄目よって？

私「お前も一緒にやつといでって。

少女A「

私「実は、私、ラジオの仕事もしてるんですが。

少女A「ラジオを。

私「売れっ子のD・Jの番組のコーナーを書いてます。週に一本。三千円。五分程のコメントです。これはもうやめるつもりなんです。

少女A「どうしてですか。

私「デレクターが注文つけるんです。

少女A「それが気にいらないんですね。表現における演出家との対立が原因で、

私「表現、ハハハ。たいしたことじゃないです。デレクターは私にこう言うんです。君、エッチとズッコケを必ず入れてくれ。

少女A「エッチとズッコケ。

私「そうです。そのデレクターは、エッチとズッコケが大衆うけする二大要素だと思ってるんです。私、これはもうやめるつもりです。

少女A「作家の生活も大変なんですね。

私「どうもすいません。グチ言っちゃって。

少女A「やっぱり、私、この本買います。

私「いや、ほんとに、それは、もう、いいです。

少女A「そうですか。あつ、そうだ。いいこと思いつきました。

私「何ですか。

少女A「私、この本を買ったつもりで、一二〇〇円で、ケーキを買ってきます。

私「ケーキ。

少女A「それからプレゼントも。

私「プレゼント。

少女A「だって、今夜はクリスマス・イヴでしょ。

私「ああ、そうでしたね。

少女A「ちよつと待って下さい。すぐにもどつて来ますから。

私「ええ、いいですよ。

少女A「それから、お友達も連れてきます。

私「ええ、いいですね。

少女A「待って下さいね。

私「はい。

少女は、闇に駆けて、見えなくなった。

2

一九八七年十二月二十四日午後七時。

私はブランコをゆらしながら、少女の帰りを待っていた。

少年が現れた。彼もチョコレートを持って立っていた。

少年A「作家の方ですね。

私「えつ、あつ・・あの君は？

少年A「さつきまで、ここに高校を出たくらいの、僕より、ちよつと年上の女のこがいた
でしょう。

私「ええ。

少年A「彼女はいま、あなたに送るプレゼントを捜しに町中を駆け回っています。僕は彼女の友人です。電話をもらって、ここへ行けといわれたんです。

私「ああ、そうなんですか。

少年A「そうです。

私「じゃあ、君と二人で待っていればいいわけなんですね、ここで。

少年A「はい。

私「ここは、寒いから、何処か別の山場所にすればよかったですね。

少年A「いえ、ここでいいですよ。

私「寒くはないですか。

少年A「平気です。

私「そう、ですか。

少年A「僕はいつも、オートバイに乗ってるんです。オートバイなんて、もっと寒いですよ。

私「へーえ、オートバイですか。

少年A「はい、400ccです。大きなヤツです。

私「ナナハンとかいうやつですか。

少年A「いえ、400ccです。ナナハンは排気量が700ccのやつです。

私「へーえ、それがオートバイの中では、いちばん大きなヤツなんですよね。

少年A「いいえ、もっと大きなものもありますよ。

私「もっと大きなものですか。

少年A「僕のダチなんか、1000ccに乗ってます。

私「それじゃあ、まるで乗用車なみだな。

少年A「オートバイ、好きですか。

私「いえ、特に。私は、オートバイの免許は持ってませんから。

少年A「オートバイはいいですよ。

私「そうですか。

少年A「ぶっちぎって飛ばすと最高です。

私「君は、暴走族とかいう、あてのひとですか。

少年A「そういうふうにいわれませんが、僕はつるんで走りません。ですから、族というわけじゃないんです。

私「ぶつちぎって飛ばすのは、どんな気分なんですか。

少年A「ふだん止まっている僕のエネルギーが、速度のエネルギーになって、僕は僕でなくなつて、何かの速さだけになつてしまふ、そんな感じですよ。

私「なるほど、それは哲学的ですね。

少年A「えっ？哲学。

私「存在が速度になるんですよ。

少年A「僕は哲学は知らないですよ。

私「いや、私も、そんなに知っているとこのわけじゃありませんが。

少年A「先生は作家だから、きっと、なんでも哲学にみえるんですね。

私「そんなことはありませんよ。

少年A「いえ、僕のオートバイを哲学だなんていったのは、先生が初めてです。

私「いや、ただ、

少年A「先生、お願いしてもいいですか。

私「え？

少年A「先生の哲学で、僕の悩みを聞いてほしいんです。

私「いや、あの、哲学だなんて、その。

少年A「悩みごとが多いんです。でも、まあ、だいたいの悩みはいいんですが、研いでもらいたいというのは、ひとつ、あるんです。

私「ですから、君、私はそんなに偉い人間じゃないから。他人の悩みなんて、

少年A「そうですか。．．．

私「．．．．。

少年A「．．．．。

私「．．．まあ、聞くだけなら。何ですか、その、

少年A「そうですか。

私「ええ。

少年A「はい。．．．

私「何ですか、まさかそのシンナーをやつてるとか、

少年A「シンナー。

私「いや、たとえばですよ。

少年A「やりません、僕は。ダチでひとり、やつてるヤツがいましたが、そいつはいま入

院しています。

私「シンナーの吸いすぎで呼吸器をやられたんですね。

少年A「いえ、盲腸です。

私「盲腸。

少年A「はい。そいつ、病院でも吸ってるんです。

私「あっそ。

少年A「いつていいでしょうか。

私「え？

少年A「悩み事。

私「あ、はい。

少年A「僕は、ダチにも、それから彼女にも隠していることがあるんです。

私「隠しごとですか。

少年A「僕、隠れて、

私「はい。

少年A「ある本を読んでいます。

私「本？

少年A「そうです。

私「それは、あれですか、未成年が買えないような、その、

少年A「太宰治を読んでいるんです。

私「その、えっ、何です？

少年A「隠れて、太宰治を読んでいるんです。

私「太宰、治って、あの、走れメロスとか、ヴィヨンの妻とか、あれ？

少年A「はい。

私「それで？

少年A「それでって？

私「いや、その、だから、悩み事です。太宰を読んで、何か悩んでるんですよ。

少年A「ええ、ですから、僕、太宰を読んでいるんです。

私「はい。

少年A「それが悩み事です。

私「うーん。つまり、どういうことですか。

少年A「かくしてたんです。友だちにも彼女にも。

私「太宰治を読んてるってことをですね。

少年A「はい。どうしたらいいでしょう。

私「うーん、よく分からないですねえ。

少年A「そうですか。

私「太宰を読んじやいけないことでもあるんですか。

少年A「分かりません。

私「あれも文学ですから、私だって、殆ど読んでますよ。

少年A「それは先生が作家だからでしょ。

私「作家になる前から読んでますよ。丁度、君つくらいの年頃でしたっけねえ。

少年A「僕は明かるい性格のふりをしているだけで、ネクラなんです。だって、太宰をか
くれて読んでるんだから。

私「私は別にそれはどうってことないと思いますよ。

少年A「そうでしょうか。

私「そうだと思います。

少年A「先生は太宰治をどう思われるのですか。

私「うーん。天才的な、うーん、作家、だと、思い、ますが。

少年A「内緒にしておいて下さい。今の話。

私「ええ、いいですよ。

少年A「ほんとに、おねがいします。

私「はい。

少年A「あつ、忘れるところだった。

私「え？

少年A「家を作らなくちゃ。

私「家？

少年A「頼まれていたんです。

そう言うと少年は、チョークで地面に線を引き始めた。

私「ああ、なる程、家ね。平面図ですね。

少年A「ここでクリスマスをするんです。

私「寒くありませんか。

少年A「大丈夫。セントラルヒーティングにしますから。

私「なる程。

少年A「ワンルームでいいですね。

私「いいですよ。

少年A「これくらい広いワンルームに住んでみたいと思うですよ。先生はマンションですか、一戸建ですか。

私「とんでもない。私は借家住いですよ。

少年A「嘘でしょ。

私「本当です。

少年A「作家なのにですか。

私「どうも世間の人は、作家というのを誤解しているようですね。作家というのは立派な書齋を持って、座机に着物姿でむかっている。それで、回りは本や資料がいっぱいで、難しい顔をしながらか原稿用紙にモンブランを滑らせている。こういう風に考えてみえるようですね。

少年A「そうじゃないんですか。

私「そうである方もおります。しかし、私は違う。私は、劇作家と自称していますが、演劇の台本を書くのは、私の所属している小さなサークル劇団にだけで、後はぬいぐるみのイベント屋の片棒かつぎですから、そういうわけにはいきません。

少年A「書齋はないんですか。

私「仕事場にあります。家は借家ですし、女房子供がおりますから、とても書きものなど出来ません。ですから家の近所に三畳ほどの小部屋の下宿を借りて、そこで仕事してんです。もちろんモンブランなど買えませんから、未だにボールペンです。三年前に、うっかりと出版などしたばかりに、サークルの劇団員の後輩がいる大学に、講演を頼まれて、そこで、月収は幾らだとか、お住いはとか、書齋はとか、いろいろ質問されましたね、冷汗ものでした。

少年A「講演はなさったんですか。

私「講演といっても、私など、名前のない二流作家ですから、人が集まなくて、結局、十人くらいの学生を相手に一時間しゃべりましたが、とちゅうで、三人程帰りました。話

がつまんなかったんですね。

少年A「どういう話をされたんですか。

私「私の大学時代 でした。しかし、特にどうのこうのいう程の話じゃないです。ただ私は大学には行かずに、演劇部にだけ所属していたもんですから、その当時の、ニセ学生の思い出をね、少し、ええ。

少年A「先生、この部屋の並びに書齋を作りましょう。

私「そうですね。そりやどうも。

少年A「そこに本棚の代わりにパソコンを置きます。それを、モンブランの代わりに使ってください。

私「スゴイですね。

少年A「ですから、4000のオートバイをこちらつかわに置いてもいいですよね。

私「いいですよ。え？でも、オートバイは、

少年A「さっきの話は嘘です。

私「嘘？

少年A「まったくの嘘ではないです。僕の持っているのはゼロハンつまり5000のミニバイクです。しかし、それも売ってしまったんです。

私「そうですね。

少年A「アルバイトをして、十一万円で買ったのです。売った時は三万円にしかありませんでした。

私「それなら、いつそのこと4000なんかじゃなくて、ナナハンか10000にすればどうです。少年A「いいえ。僕は4000でいいんです。大きなものはバイク自体が威張っているように嫌いです。

私「いやあ、感心感心。君には哲学が、やはり、あると思います。

少年A「そうですね。

私「そうですね。

少年A「さて、ここが入口です。キイはボタン式になっています。六ケタの数字を押すと、それが信号になってドアが開きます。僕は昭和〇〇年、〇月〇日生まれましたから、（

）と押します。先生は？

私「私は昭和二十七年の七月五日です。

少年A「すると2000ですね。

私「そうですか。」

少年A「これでメモリーナンバーを押します。すると、今のいずれのボタン信号でも、ドアは開きます。メモリーナンバーは五ケタの数字を使用します。0004をしましょう。」

私「すごい錠前ですね。」

少年A「ええ。」

私「しかし、停電になると困りますね。」

少年A「大丈夫です。電源は電池に自動的に切り替わるシステムです。」

私「なる程。」

少年A「さあ、入りましょう。そして、彼女を待ちましょう。」

私「ええ。でも、寒くありませんか。」

少年A「僕は平気です。先生は？」

私「私も平気です。」

少年A「坐りましょう。そして、彼女を待ちましょう。」

私たちは、その家の中央に坐った。

3

一九九七年十二月二十四日午後八時。

少女が紙袋を下げて帰ってきた。

少女A「（　　）。ただいま。」

私「お帰りなさい。」

少年A「お帰り。」

私「入口のボタン、分かりました？」

少女A「あら、ボタンだったんですか。私、音声信号だとばかり思ってた。」

少年A「大丈夫だよ。音声信号に変換可能なようにセットしておいたから。」

私「音声信号？」

少年A「ひらけゴマと同じです。ボイスウェイブに反応するです。

私「なる程、ボイスですか。

少女A「一番小さなケーキを買ってきました。丁度三人で食べられます。あ、食べきれません。

私「いや、食べきれるので、それはいいんです。きれるといふのは、つきるといふことですからね。切るといふのは、動詞の四段活用でしょ。切ろう、切ります、切る、切るとき、切れば、切れ。切れるといふのは、下一段活用ですが、この場合、れるの助動詞の活用だと思えばいいんじゃないでしょうか。つまり、可能を現わすわけです。ですから、れ、れ、れる、れば、れる、または、れよ、ですね。ですから食べきれなくてもいいわけです。着物を着るの着るは上一段活用ですから、き、き、きる、きる、きれば、きる、ですね。これが助動詞の可能の変化をする時は、られ、られ、られる、られる、られれば、られる、または、られよ。つまり、物を切断する場合の切ると、着物を着る場合の着るは、活用がもともと違うんです。もちろん、それは、認識としてですね、えーと、

少年A「ケーキ、食べましょう。

私「そうですね。えと、あの、チリ紙ありませんか。

少年A「どうしたんですか。

私「ちよっと、舌をかんだようなんです。舌から血が、ちよっと。

少女A「ハンケチでいいですか。

私「あ、すみません。洗って返しますから。

少女A（ケーキを切ろうとしていたが、ふいに思案して）

少年A「どうしたの。

少女A「どういう具合に切ろうかしら。

少年A「三分分すればいいじゃないか。

少女A「ええ、だから、どういう具合に三分分すればいいかなと思って。

少年A「どういう具合って？

少女A「サンタがいるでしょ。トナカイがいるでしょ。ここを切ると、二つは、離ればなれになるわ。でもここを切らないと三分分できないし。

少年A「それは、そういうことは女の君が考えろよ。

少女A「あら、どうして。

少年A「だって、僕は、そういうことは君にまかせたいと思っっているんだ。

少女A「そう。」

少年A「うん。」

少女A「じゃあ、あなたは何を考えるの。」

少年A「そうだな。　　そうだ、クリスマス飾りつけをやるよ。金モールをつったり、点滅電球をつけたり。」

少女A「そういうことは、私が帰ってくるまでにやっておけばよかったのに。」

少年A「ごめん。気がつかなかったんだ。」

少女A「何をしてたの。ただボンヤリとしていたの。」

少年A「だから、ごめんって言ってるじゃないか。」

少女A「私、ケーキ屋さん六軒も回ったのよ。」

少年A「だから。」

私「あの、あのですね、彼は私のために書斎を作ってくれたりしたんです。つまり、そういう余計なことに手間どってですね、今、丁度一休みしたところだったんです。それから、その、サンタとトナカイはですね、こうしたらどうでしょう。」

少女A「どうするんですか。」

私「ケーキからはずして、ここんところに置いて、つまり、食わずに、それを見ながら、ケーキを食べるんです。」

少女A「まあ、いい考えだ。」

少年A「グッドですね先生。」

少女A「やっぱり作家の考えることは違いますね。」

私「そうですか。ハハハ。」

少年A「ねえ君、これから、つままないことでケンカするのはやめようよ、ね。」

少女A「ええ。でも、時々つままないことでケンカしましよ。」

少年A「どうして。」

少女A「重要なことでケンカすると、取りかえしがつかないことになるかも知れないでしょ。でも、つままないことなら、時々ケンカした方が楽しいわ。夫婦生活も新鮮になるし。」

少年A「それもそうだね。」

私「夫婦生活？」

少年A「え、あ、いやあ。」

少女A「かくしていたわけじゃないんです。私たち結婚しているんです。」

私「結婚。」

少女A「はい。」

私「でも、まだ、その。」

少女A「二人とも高校中退です。ちよつと年齢を誤魔化して、結婚したんです。」

私「どうしてですか。」

少女A「私に赤ちゃんができたからです。」

少年A「三ヶ月です。」

私「へーえ。」

少女A「二人とも真面目に生きていくつもりです。私、ほんとは歌手になりたかったんだけど。ごめんなさい先生、本の宣伝できなくて。」

私「いや、そんなことはいいです。」

少女A「でも、私、子供が保育園へ行くようになったら、歌手の道に挑戦します。そうしたら、きっと先生の本も宣伝します。」

私「どうも、ありがとう。」

少女A「彼も昼間は土建屋でアルバイトして夜はコンピューターの学校に行くんです。」

私「コンピューターの。」

少女A「はい。だって、これからはコンピューターの時代だから。彼は見かけより堅実なんです。シンナーもやらないし、煙草も吸わないし、太宰治も読まないし。」

私「そ、そうですか。」

少年A「先生、現代のコンピューターが第五世代に突入していることを知っていますか。」

私「第五世代？」

少年A「ええ。第一世代は真空管。第二世代はトランジスタ。第三世代は集積回路。これは「IC」と呼ばれてますです。インテグレイテッド・サーキットの頭文字の「IC」です。第四世代は超集積回路が使われていて、第五世代になると、人間の脳に近いんです。形式論理的推論ができるんです。人間の脳の機械的思考の分野はおそらくこれから何世代かの間に、全てコンピューターでやれるようになります。」

私「すると人間はどうなるんでしょうね。」

少年A「人間は初めて人間になるのだと思います。」

私「ほお。」

少年A「簡単な引き算です。人間からコンピューターを引くんです。そうするとついにコ

ンコンピューターでは及ばない人間の人間たるものが、残るでしょ。

私「ええ。」

少年A「非人間的なもので、人間にあったものは、コンピューターによって、とって代わられますから、人間には、人間でしかないものが残ります。その時、人間はついに、人間的人間を意識することになります。これこそが、真のコンピューター革命なんです。コンピューターが人間にとって代わることがコンピューター革命ではないのです。」

私「スゴイ。」

少年A「今のはウケウリです。」

少女A「でも、人間的人間で、どんな人間なんでしょうね。」

私「さあ。」

少女A「コンピューターでは真似のできないものだから

私「はい。」

少女A「食べて、

私「はい。」

少女A「飲んで、

私「はい。」

少女A「恋をして、

私「ええ。」

少女A「愛しあって、

私「ええ、ええ。」

少女A「子供を生んで、

私「ええ。」

少女A「とし老いて、

私「え、え。」

少女A「死んでいくことですね。」

私「そうですね。」

少女A「泣いて、

私「はい。」

少女A「笑って、

私「はい。」

少女A「とし老いて、

私」

少女A「死んでいくことですね。

私「そう、ですね。

少女A「人間は淋しいですね。

私「かも知れません。

少女A「私が死んでしまうと、もう私は二度と生まれてこないんですね。

私「そうですね。

少女A「私はこの世界にたった一人しかいないんだし。

私「はい。

少女A「私もほんとは淋しいんですね。

私「いや、それは、誰だってあなた。

少女A「さあ、ケーキをいただきますしよ。

私たちは、ケーキを食べた。

私「あなたたち、寒くありませんか。

少女A「いいえ、あなたは？

少年A「寒くないです。君は？

少女A「いいえ。

4

一九九七年十二月二十四日午後九時。

少年と少女は横になっている。

少女A「あら、流れ星。

少年A「どこ？

少女A「あそこ。

少年A「あ、あそこにも流れ星。

私「どこですか。私には見えなかったですが。

少女A「もう消えちゃいました。

私「そうですか。

少女A「あ、忘れてました。

私「何をですか。

少女A「プレゼントです。

私「プレゼント。

少女A「その紙袋の中を見て下さい。

私「はい。

少女A「ありましたか。

私「はい、ありました。紙包みが二つ。

少女A「一つは彼に、大きい方は先生に。

私「いやあ、それはうれしい。何かな。あつ　これは私の本。

少女A「そうです。でも、さっき私がいただいたものと違います。私、古本屋さんを回って捜してきたんです。

私「そうですか。

少女A「先生の本、売ってました。古本屋さんだから、きっと、誰かが何処かで買って、それで、それから、売ったんですね。先生の本、売れたんですよ、二回も。

私「そうですね。

少女A「私を買ったから、三回です。一冊の本が三回も売れたんですね。

私「はい。

少女A「もう一つの包みを開いて下さい。

私「はい。　これはエーと、

少女A「ヘッドフォンです。

私「ああ、町でよく見かける、若い人が耳にしているあれですね。

少女A「それを彼の耳に。

私「彼は？

少女A「もう眠っています。

私「寒くありませんか。

少女A「平気です。

私「これを彼の耳にしてあげればいいのですね。

少女A「はい。カセットの機械をかうお金がなかったので、せめてヘッドフォンだけでも。

私「つけました。これでいいですね。

少女A「はい。

私「何か聞こえるのかな。

少女A「私の歌が聞こえると思います。

私「ああ、そうですか。

少女は唱った。

月の砂漠をはるばると

旅の駱駝がゆきました

金と銀との鞍置いて

二つならんでゆきました

金の鞍には銀の甕

銀の鞍には金の甕

二つの甕は それぞれに

紐で結んでありました

さきの鞍には王子様

あとの鞍にはお姫様

乗った二人は おそろいの

白い上着を着てました

曠い砂漠をひとすじに

二人はどこへゆくのでしょうか
鷹にけぶる月の夜を
対の駱駝はとぼとぼと

砂丘を越えて行きました
黙って越えて行きました

加藤まさと作詞「月の砂漠」
佐々木すぐる作曲

雪が散らつてきた。

私「寒くありませんか。

少年も少女も、何もこたえない。

私「雪ですね。

私はまたブランコに腰をおろした。

少年と少女の上に、雪は降り積んでいく。

私「少女を眠らせ

少年を眠らせ

雪は降り積む

人類の進化と

未来と歴史を眠らせ

雪は降り積む

魚と時計と

象とインダスト

酒と百合の花と

鉄と音楽と

麦と大陸と

それから この

大空の夜とを眠らせて

雪は

ん？ 流星か？

辺りが少し輝いて、天使がきた。

私「誰だ。

天使「見てのとおりです。

私「ほお、エンジェル。 天使ですか。

天使「先程の流れ星はごらんになりましたね。

私「ええ、見えましたとも。

天使「あなたは死にました。

私「え？

天使「あなたは死んだのです。

私「私が？

天使「そうです。凍死です。

私「そんなバカな。

天使「明朝、あなたの死体はここで、発見されるでしょう。

私「嘘でしょ。何か、その、クリスマスの大サーブスか何かで、その、あなた。

天使「残念ながら、あなたの肉体は滅びました。

私「しかし、こうやって私は、まだ、

天使「仕方ありません。誰でもそうなんです。肉体の残留思念が魂にある間は、そんなふうに思えるのです。しかし、もうあなたは死んだのです。

私「でも。

天使「現に私がここにこうやって、やって来ているではありませんか。

私「それじゃあ私を天国へ連れて行って下さるのですか。

天使「いいえ。

私「じゃあ、地獄っ。

天使「いいえ。

私「じゃあ。

天使「あなたが天国へ行くか、地獄へ行くか、それは、あなた自身が選ぶことです。

私「え？選ぶ？

天使「そうです。

私「じゃあ、その、

天使「ここに、青い布と赤い布とがあります。ひとつは天国、ひとつは地獄です。永久にひとつを選びなさい。あなた自らの勇気でどちらかを選ぶのです。

私「そんな、クジ引きみたいな、そんなあなた。

天使「みんな、こういう具合にしているのです。誰だって、そうです。どんな人間でも、死んだらどちらか選ぶのです。

私「まさか、そんな。死ぬ時になって、急にこんなふうには、そんな無茶な。

天使「選ぶのはあなた自身です。文句は言えません。確率は五〇%。さあ。

私「いやです、いやですよ。

天使「決められているのです。

私「拒否したら、どうなるのです。

天使「拒否すれば、この世で、最も醜いものとなって、永遠に生きねば、

私「わ、分かりました。え、選びます。

天使「青ですか、赤ですか。

私「あ、あ、あ 青！

天使「青は地獄です。

私「ジ、地獄！

天使「選んだのはあなたです。

私「そ、そんな。

天使「もし、あなたが赤と言っていれば、このまま私とともに天国の門をくぐれたでしょう。残念でした。

天使はそう言うと、少年と少女を起こした。

天使「さあ、あなたたちも選びなさい。どちらかが地獄、どちらかが天国です。

少女A「同じ色を選びましょう。天国でも地獄でも、離れ離れになるよりはましなもの。

少年A「いいや、別々の色を選ぼう。もし君が地獄なら、僕が代わってあげるから。君を地獄に落とすわけにはいかない。

天使「選びなさい。

少女A「私一人じゃどっちもイヤ。お願いだから同じ色にして。

少年A「

天使「選びなさい。

少女A「青にしましょう。青よ。

天使「青。

少年A「僕は赤だ。

少女A「どうして、どうして同じにしないの。

少年A「君は天国へ行け。僕は、僕は男だ。

天使「青は地獄。赤は天国。

少年A「彼女に赤をやってくれ。僕が青をもらう。

天使「そんな勝手なことできません。

少年A「僕は地獄でいいと言ってるんだ。

少女A「イヤよ、別れ別れなんてイヤよ。

天使「お眠りなさい。

少年と少女は元のように眠った。天使は目印の布を、その上に置いた。少年は赤、少女は青。

天使は私のところにやってきた。

天使「あなたも眠るのです。今度目覚めたら、そこは地獄です。

私はポケットから煙草を出して火をつけた。

天使「眠りなさい。

私「灰皿、ありませんか。

天使「え？

私「灰皿。

天使「ハイザラ？

私「公園を汚したくないもんでね。

天使「お眠りなさい。

私「灰皿、持ってきてくれませんか。

天使「どうして眠らないのだ。

私「あっそうだ。携帯用のを持ってたんだ。

天使「眠るのだ。えい、眠れ。

私「灰皿ありましたからもういいです。

天使「眠れ！

私「うるさいなあ。そんなにうるさくすると寝てる子も起きますよ。

天使「こんなバカな。

私「天界での所属と階級を言ってみなさい。

天使「何？

私「まさかセラフ（熾天使）ではあるまいに。天軍三級九隊のどの軍に属しどの階級であ

るかを言え、と言ってるんです。

天使「何者！？

私「私は、一番上に「サ」の字のつくものです。

天使「作家であろうが。

私「作家としての人生は終わった。だってあんた、私はもう死んだって、そう言ったじゃ

ない。

天使「では、サ、サ、魚屋！

私「はずれ。

天使「では。

私「神と一緒に天地を創った者です。神が人間でいうところの七歳の、そして私が十三歳

の少年の姿をしている。こう言えば下級天使の君にも分かるだろう。

天使「ま、まさか。

私「帰ったら、天軍総帥のミカエルに言ってくれ。たまには、天界と地上との任務を交代してくれとな。

私は青い布を天使に投げつけた。

私「その少年少女の目印も持ってかえってくれ。そしてもう一度出なおしてこい。

天使は血相を変えて去った。

私「作家か。富への欲心、名誉欲、高慢、淫ら、無頼、もう少し面白い人生かと思っていたが。意外につまらんもんだったな。

私は自嘲しながら、眠る少年少女の傍に佇んだ。

私「人開からコンピューターを引き算すると人間的人間が残るか。ではそこから悪魔の仕事と天使の仕事を引けば何が残る。食って寝て、年老いて死んでいく。

寒くありませんか。

雪は二人の上に降り続けている。

☆

『日本語の誤典』（村石利夫）を参考にしました。礼。